水上舞台で地歌舞

27日に鳳仙寺庭園で

桐生に根付いてほしい

古澤さん「楽しみであり、怖くもあり」

桐生市梅田町一丁目の鳳仙寺庭園、池の上にしつらえられる舞台で27日夕、「地歌舞の世界」が展開される。同寺で1年前から地歌舞を伝授している古澤侑峯さんが、桐生にこの伝統芸が根付くことを願って舞う。開始は午後6時、寺の鐘の音が合図となる。

鳳仙寺沢の水をあつめる池の上に特設される4×6メートルの舞台で、古澤侑峯さんが舞う

地歌舞は上方舞ともいわれ、平安時代からの宮廷舞踊の流れをくむ。能の影響も受けながら、近世には長唄や清元も用いて座敷芸として確立されてきた。しかし野外で古典を舞う機会は初めてだそうだ。「このお寺はりんとした気高さと温かさのバランスがとれた素晴らしい場で、けいこしているだけで心が洗われるよう。庭園の水上舞台で見ていただけるのは、楽しみであり、怖くもあります」と語る。

地歌舞は上方舞ともいわれ、平安時代からの宮廷舞踊の流れをくむ。能の影響も受けながら、近世には長唄や清元も用いて座敷芸として確立されてきた。しかし野外で古典を舞う機会は初めてだそうだ。「このお寺はりんとした気高さと温かさのバランスがとれた素晴らしい場で、けいこしているだけで心が洗われるよう。庭園の水上舞台で見ていただけるのは、楽しみであり、怖くもあります」と語る。

古澤さんは古澤流家元の長女に生まれ、2歳から舞を学んできた。無駄を削ぎ落とした爛熟の美に、舞手の心を注入しての表現は「日本人の中に流れる血を感じる」という。

現在は東京、大阪、桐生で教えており、桐生の「鳳の会」では女性4人が毎月2回、けいこを続けている。「舞に入るときは、名前も年齢も性別も捨てていく。舞ううちに万華鏡をのぞくように、各人各様の色が出てきます。ご自身の発見にもなると思います」と、その時々の心の動きを重んじる。ゆったりとためこんだ動作のため、身体にもよい。

古澤さん自身は伊勢神宮の奉納舞や源氏物語を題、そして「本行もの」とされる安珍清姫のドラマチックな大作で、オリジナルの振り付けによる「古道成寺」。尺八を吉岡龍見さん、地歌と三絃は富元清英さん。午後5時半開場、同6時開演、新緑に山の闇が迫る約1時間半の公演は鐘ではじまり鐘で終わる。

会費は3千円で、問い合わせは鳳仙寺(電32・1177)、奈良書店(電22・7967)へ。

テーマにした公演のほか、琵琶やジャズ、現代音楽、絵画、詩など異分野とのコラボレーションにも果敢な試みを続けてきた。

演目は末永く添い遂げた男女をことほぐ「鶴の声」、こぬ人を待つ女心をうたい「艶(つや)もの」と呼ばれる「袖の